

タンゴから聴こえるバラード コルタサル「帰還のタンゴ」と ボウエン「悪魔の恋人」をめぐって

野口 優

1. はじめに

本稿で取り上げる短篇小説「帰還のタンゴ」（原題 “Tango de vuelta”）はアルゼンチンを代表する作家の一人であるフリオ・コルタサル(Julio Cortázar, 1914-1984)が晩年に執筆した短編集『愛しのグレンダ』(*Queremos tanto a Glenda*)に収められた親しみやすい作品である。しかしその親しみやすさの一方で実は奥深い面をもちあわせており、本稿ではこの作品をイギリスの作家エリザベス・ボウエン(Elizabeth Bowen)の短篇「悪魔の恋人」(“The Demon Lover”)と比較し、両者の関係を考察する。さて、コルタサルの後期作品に注目すると、たとえば、「赤いクラブとの再会」(“Reunión con un círculo rojo”)や「猫の視線」(“Orientación de los gatos”)、「グラフィティ」(“Graffiti”)など、様々な形で絵画と関わりのある作品が多数存在していることに気がつく。では、一見したところ絵画とは無縁な「帰還のタンゴ」に、絵画との隠れたつながりはあるだろうか。まずは作品の来歴を探ってみることにしよう。2005年12月27日付けのスペインの新聞El País紙にはア・コルーニャ市フェノーサ協会現代美術館(el Museo de Arte Contemporáneo de Unión Fenosa de A Coruña)で開催されたオランダの画家パット・アンドレア(Pat Andrea)の回顧展の記事が掲載されている¹。その記事によれば、短編集『愛しのグレンダ』に収められたこの短編「帰還のタンゴ」は、もともとアンドレアから画集のためのテキストを依頼されたコルタサルがプロローグや紹介文を書く代わりに書き上げた作品で、そのときのタイトルは冠詞付きの“El tango de la vuelta”だったという。そこでさらに調べてみたところ、この作品をめぐる以下のようなストーリーを知ることができた。アンドレアの手になるナイフによる殺戮の場面を集めた一連のデッサンとコルタサルのテキストで構成されたこの本は、*La puñalada / El tango de la vuelta* (『ナイフの一撃／帰還のタンゴ』)と題され、オランダ語、フランス語版が1982年に少部数出版されたものの、英語、スペイン語版の印刷の段になって編集を担当していた画廊経営者が経営難から失踪したために一度は闇に埋もれてしまう。ところが2000年になってスペイン語版のこの本を収めたケースがマイアミに保管されていたことが明らかになり240部が再発見された。しかし、もともと全部で何部印刷されたのか、残りはどこへ行ってしまったのか誰も知らないのだという²。さらにこの本の奥付には、

コルタサルがパリのモンパルナス墓地に埋葬された翌日の1984年2月15日に印刷を完了した旨が記されていると紹介したエッセイもある³。なんとも奇妙なめぐりあわせだが、偶然の一致や運といった言葉は子供の頃から信じていない⁴、と語るコルタサルにふさわしい偶然ではないか。しかも、タイトルからは、むしろ音楽を連想させるこの作品が、実は絵画とつながりを持っていることは注目に値するだろう。さて、作品と絵画との関係は明らかになった。では、タイトルが示唆するもう一方の芸術、すなわち音楽に関しては何か隠されているだろうか。本稿は音楽をめぐるこの作品を探ることになるだろう。議論の手がかりは「帰還のタンゴ」にあらわれる奇妙な「幽霊」である。しかしその前にこの作品のあらすじを簡単に紹介しておきたい。

2. 「帰還のタンゴ」の奇妙な「幽霊」

主人公マティルデ(Matilde)はメキシコでのエミリオ(Emilio)との貧しい結婚生活にうんざりし、夫を棄て、裕福な経営者ヘルマン(Germán)と再婚してブエノスアイレスで新たな暮らしを始めようとする。しかしエミリオと結婚しているという事実が妨げになったため、彼の死亡届をねつ造し、書類の上で死んでいることにした上でヘルマンと結婚、息子カルリートス(Carlitos)とお手伝いのフローラ(Flora)とともに暮らしていた。事件はヘルマンが仕事で家を空けている間に起こる。エミリオらしき人物が事実をつきとめたのかマティルデの家の周りに出没し、シモン(Simón)という名を名乗ってフローラを手なづけ、彼女の恋人として家に出入りするようになるのだ。結局どうやらシモン(エミリオ?)はフローラと関係を結ぶに至り、その直後に彼女を残してマティルデの部屋へと向かって、そこで二人はもみ合いになる。マティルデはシモンをナイフで刺し殺してしまうが、彼の出現以来、気が滅入って睡眠薬を常用していた彼女はすでに錠剤を誤って飲み過ぎていたため、そのせいでマティルデもまた死んでしまう。

取り扱われるテーマは通俗的だが、錯綜した語りが作品に幻想的な雰囲気をもたらし、徐々に膨らむマティルデの恐怖に歩調をあわせて加速する展開がこの短篇の魅力だろう。マティルデのもとを訪ねて来るエミリオらしき神出鬼没の人物の不気味さは、幻想的な雰囲気や恐怖を醸し出す上で重要な要素だ。以下に引用するエミリオの描写は彼の不気味さを端的に表現した、しかし同時にどこか奇妙な印象を読者に与える箇所である。

幽霊じみたところは微塵もなかったけれど、口数も少なければ口をきく相手も少なかった、ゴム底の靴に黒のジャンパー、茶色のズボンを穿いていた、何かをちらりと見やるときの素早い目の動き、下宿屋の女将に言わせれば、人目をはばかる物腰。彼は幽霊ではなかったとはいえるまでそこにはいないかのようにであり、彼を取り巻く孤独は、もうひとつの沈黙のようでもあ

り、首に巻いた白いスカーフか、その薄すぎるほどの唇からめったに離れることのない煙草の煙のようでもあった。⁵

得体の知れない不気味さをまとった男の姿が目には浮かぶようだ。「幽霊じみたところは微塵もない」とすることで逆説的に幽霊のイメージがもたらされる。しかし、この人物が復讐にやって来たエミリオならば幽霊じみたところが微塵もないのは当然でわざわざ断るまでもない。唐突に「幽霊」に言及するのはどこか不自然ではなかろうか。むしろ戻って来た男は幽霊であって当然なのにそうではなかったとでも言いたげな印象を与えている。だが、そうだとすると、なおさらストーリーの展開にそぐわないように思える。というのも、一般的なタンゴの歌詞に幽霊が登場しない以上、タンゴの歌詞風のこの作品に幽霊の出る余地はないからだ。しかし、この箇所が読者の注意を引くことは確かで、例えばラウル・シルバ＝カセレス(Raúl Silva-Cáceres)は彼の著書の中でまさにこの一節を引用し、この短編をコルタサル作品における死者の帰還というテーマに位置づけている⁶。さらにこの「幽霊」をより不可解なものにしているのは他ならぬコルタサル自身の言葉である。コルタサルはオマール・プレゴ・ガデア(Omar Prego Gadea)との対談の中で自身の作品における幻想ということについて、現代の幻想は、幽霊や超自然が登場人物の運命を左右するようなゴシック文学のこねあげられた幻想とは違うとした上で⁷、さらにはっきりとこう述べている。

[……] あなたもよく知っているとおり、私は幽霊と一緒に仕事をするのは好みじゃないんだ。⁸

幽霊を作品の道具にするのは好きではないと公言しているとなると、なおのこと、幽霊のイメージを逆説的に作品に持ち込むこの描写は奇妙に感じられる。ではなぜこのような一節が置かれたのだろうか。先にも述べたように、この一節は、戻って来る男は幽霊のはずだったという印象をもたらし。とすると、この場面で幽霊を引き合いに出す理由、例えば同様のテーマで幽霊の登場する先行作品が存在するのでは、と考えられる。本稿では後に述べるいくつかの理由から、エリザベス・ボウエン(Elizabeth Bowen, 1899_1973)の短編小説「悪魔の恋人」(“The Demon Lover”)⁹をその候補として取り上げる。

「悪魔の恋人」の舞台は第二次世界大戦下のロンドン。主人公ミセス・ドローヴァー(Mrs. Drover)は空爆の激しくなったロンドンの家から疎開して、夫と三人の子供と暮らしている。ある日、彼女はロンドンの家に残っていた荷物を一人で取りに帰ると、そのことは誰も知らないはずなのにテーブルの上に真新しい手紙が置かれていたため、彼女は不審に思う。手紙は戦死したと伝えられたかつての婚約者からのもので、「約束の時間に会いに行く」

と書かれていた。婚約者は普通の人間とは違うなにかを感じさせる不吉な人物だった上、彼が戦争から帰るのをずっと待ち続けるという約束を破って結婚していた彼女は恐怖を感じて逃れる術を求める。一人きりでは危険だと考えた彼女がタクシーで駅に向かうと、七時の鐘が鳴り、運転手と目が合った彼女はそこにかつての婚約者を認め、絶叫するがそのまま連れ去られてしまう。¹⁰

つまり、ふたつの作品は結末を除けば、相手の男を裏切ったヒロインのもとへ当の男が戻ってくることで引き起こされる事件を、彼女の視点で描き出すという点で共通しているのだ。さらに両作品を比較しながら改めて読み直すと、細部にまで共通するテーマや表現が織り込まれていることに気づかされる。たとえば、「悪魔の恋人」では不可解な手紙が主人公の運命を握り、「帰還のタンゴ」ではソファアの上に放り出された一冊の本がその役割を果たす。(これについては後に議論する。)「悪魔の恋人」では鐘の音が迫り来る「約束の時間」を読者に意識させ、ミセス・ドロヴァーのつる恐怖を表現する上で効果を挙げている。一方、「帰還のタンゴ」の鐘の音はどこか謎めいている。

マティルデが二杯目のウィスキーを飲んでいると、どこか遠くの鐘が十時を打つのが聞こえた、彼女はそれまでその鐘を聞いたことがなかったと思いながら鐘の音をひとつずつ数え、電話を見つめた¹¹

「それまで聞いたことがなかった」というのはどういうことだろう、と考えて思い当たるのは、夜十時のブエノスアイレスではそもそも鐘が鳴るのかということだ。ことによると「どこか遠くの鐘」とは、遥か遠くロンドンの街に響く鐘のことではあるまいか。というのも、ここでは詳しく触れないが、短編「もう一つの空」(“El otro cielo”)では遠く離れたブエノスアイレスとパリを両都市のパサージュを介して自在に行き来してしまう世界として、長編『62／組み立てモデル』(62/*Modelo para armar*)ではロンドン、パリ、ウィーン、ブエノスアイレスなどといった世界中の都市とそれぞれの都市に滞在する登場人物たちが束の間出会う「街」(“la ciudad”)とよばれる特別な場という形で、コルタサルは混ざり合う都市のイメージを繰り返し用いているからだ¹²。マティルデはいつの間にか「悪魔の恋人」の舞台ロンドンへ迷い込んでしまっていたのかもしれない。

話題を「幽霊」にもどすと、「悪魔の恋人」では、ただ主人公が連れ去られてしまうだけで幽霊が戻ってきたと書かれているわけではない。しかし、しばしば指摘されるとおり、タイトル「悪魔の恋人」は明らかに同名のバラードを示唆しており、そこでは幽霊ならぬ悪魔が復讐に訪れる¹³。

3. 二つの作品の関係を暗示する記述

「帰還のタンゴ」と「悪魔の恋人」には共通する要素がいくつも存在することは以上に述べた通りである。しかしまだ「幽霊」の描写が「悪魔の恋人」への目配せであることを示すような根拠は挙げていなかった。この章では二つの作品の関係を窺わせる記述を二つ取り上げる。一つ目はエッセイ「トンネルの理論」(“Teoría del túnel”, 1947)だ。このエッセイにはコルタサルが間接的にボウエンの短編集『悪魔の恋人』に触れた箇所がある。

『ねじの回転』は——最近ではエリザベス・ボウエンの『悪魔の恋人』に収められた物語群と同じように——「現実」のあやうさ、そこでは突然関わりのないものではなくなくなってしまった力に、幽霊であることを止めて、えも言われぬほどに事件を支配すべく出来事に手出しする幽霊たちに、すべてが屈服する、そんな「現実」のあやうさを主張しているのだ¹⁴。

つまり、ここから分るのは、コルタサルが『悪魔の恋人』(これは「悪魔の恋人」を収めた短篇集『悪魔の恋人およびその他の物語』がアメリカで出版された際のタイトルのような)を、出版から数年のうちにすでに読んでいたということであり、同時に彼がボウエンの「幻想」を作り出す手法に親近性を感じていることが読み取れる。二つ目は風変わりな旅行記『宇宙道路の自動飛行士たち』(*Los autonautas de la cosmopista*)の中に見いだすことができる。コルタサルが彼の妻キャロル・ダンロップ(Carol Dunlop)とともにフランスの南部高速道路をパリからマルセイユまで一日に二つのパーキングエリアごとに進むというルールに従って約一月かけて旅行した記録であるこの作品には、彼にとってタンゴとバラードが近いものであることを示唆する一節がある。

この二人にはもううんざりしそうだ。でもそれは私がタンゴについてどんなに無知であるかをからかうために二人が待ちこがれている口実になってしまうのはわかりきったことだ。

「で、きみたちはスコットランドのバラードについて何か知っているの？」

「えっ」カラックはそう言いながら昨晚飲み過ぎたともいうように頭をさすった。「この前ブルゴーニュでやったときみたいにみんなで歌わない？」¹⁵

引用した場面はコルタサルの複数の作品に登場する架空の人物カラック(Calac)とポランコ(Polanco)が旅行中のコルタサルと議論するというフィクションである¹⁶。この二つの記述が示しているのは、コルタサルが短編集『悪魔の恋人』からエッセイに取り上げるほど強い印象を受けたこと、さらに「悪魔の恋人」の背景にあるバラードは彼にとってタンゴと近いものであるということ、いずれも二つの作品の関係を暗示していると言えよう。

4. タンゴとバラード

「帰還のタンゴ」のタイトルにもなっているタンゴに関して、アルゼンチンを代表する作家ホルヘ・ルイス・ボルヘス(Jorge Luis Borges, 1899_1986)は初期の作品『エバリスト・カリエゴ』(*Evaristo Carriego*)の中で、タンゴの官能的な特徴はしばしば指摘されるが好戦性ということについてはあまり触れられていない、しかしその二つの側面は「男性」という語が象徴する衝動に由来するもので、古来、叙事詩などを通して歌い続けられて来たモチーフなのだと述べている¹⁷。その上で彼は例としてイーリアスやベオーウルフ、ローランの歌などを挙げる。つまりヨーロッパのような長い歴史を持たないアルゼンチンにとってタンゴは、大げさに言えば神話の代わりを果たしているという見方だ。イーリアスやベオーウルフといった作品がおそらく本来もっていた口承文学の性質や神話性という点ではバラードにも共通性があり、したがってボルヘスの考えによるならばタンゴはバラードに縁のないものではない。他方、エルネスト・サバト(Ernesto Sábato, 1911_2011)は、タンゴに欠かせない楽器バンドネオンの由来などを例に挙げながら「雑種性」(“hibridaje”)を強調したタンゴ論を展開する¹⁸。これに従えば「帰還のタンゴ」はイギリスのバラードというテーマを、舞台をブエノスアイレスに移して「雑種的」に展開した変奏曲だということができるかもしれない¹⁹。

5. 「帰還のタンゴ」と「悪魔の恋人」

先に述べた二つの根拠のみで「悪魔の恋人」が「帰還のタンゴ」の先行作品であると断定することはできない。しかしコルタサルがボウエンのこの作品から着想を得たことは十分に考えられる。そこで以下の章では両作品の比較をしつつ「帰還のタンゴ」を分析したい。ニール・コーコラン(Neil Corcoran)は、「悪魔の恋人」を含む短編集『悪魔の恋人およびその他の物語』(*The Demon Lover and Other Stories*)のひとつの特徴は「ほのめかしまたは間テキスト性という文学的回帰」(“the literary return which is allusion or intertext”)だと述べている²⁰。(ここでキーワードになっているのはreturnすなわちスペイン語のvueltaにあたる語であることに注意したい。コーコランはこの語を「不吉な人物の帰還」と「文学的回帰」の二つの意味で使っている。)コルタサルが「悪魔の恋人」に影響されてこの作品を書いたとすれば、すでにその参照先の作品はバラードに刺激されて書かれたものであるというボルヘス的な構造がここに現れる。しかもこの構造はバラードなど口承文学の特徴、つまり語り継がれるなかで一つのテーマが多数のバリエーションを生み出しながら形成されることと対応しているとみなすことができる。ボウエンもコルタサルもそれぞれのバリエーションの語り手なのだ。では作品中の語り手はどうか。「帰還のタンゴ」の語り手は作中人物のフローラが語ってくれた物語を書き留めている人物だ。したがって語り手は物語の外側の存在である。ところが、その語り手は最後の場面で救急車を呼ぶ人物として、

物語の内側に登場してしまう。語り手が突然「あちら側」へ投げ出されてしまう「山椒魚」(“Axolotl”)の作者にふさわしい仕掛けだが、実は作品の冒頭ですでに語り手自身がこう語っている。

ある日気がつくとフローラがぼくにしゃべったことと彼女やぼく自身が付け加えていったことの区別がつかなくなっていた、なぜなら誰もがそうであるように、二人ともそれぞれ、その話が完結すること、最後の穴に最後の断片が、色が、脚や単語や階段から伸びる線の先端がはめ込まれることを望んでいたからだ。²¹

彼らはエミリオとマティルデの事件を題材に、まずフローラが改変を加えた彼女のバリエーションを語り手に聞かせ、今度は語り手が彼自身のバリエーションを書き留めるのだ。「悪魔の恋人」「帰還のタンゴ」の両作品の関係が断定できない以上、フローラにボウエンの姿を、また語り手にコルタサルの姿を読み取るのは深読みのしすぎだろうが、いずれにせよ作中の語りの構造が、作品間の関係とテーマであるバラードの口承文学の特徴を二重になぞっていることは指摘しておきたい²²。さて「悪魔の恋人」の怪奇的な結末の解釈のひとつは、すべては主人公ミセス・ドローヴァーの幻想だったという捉え方だろう²³。一方「帰還のタンゴ」では錯綜した語りが積極的に幻想を作り出してしまふ。「幽霊じみたところは微塵もなかった」とか聞こえるはずもない鐘の音はフローラや語り手の創り出したフィクション、「幻想」でもあるのだ。

二つの作品には類似する点が多い一方で、大きな違いもある。それは結末の場面だ。「悪魔の恋人」では連れ去られてしまうヒロインがここではナイフを掴む。いわゆるタンゴの歌詞と比べても逆転していて、ここに*vuelta*のもう一つの意味「反転」が浮かび上がるという指摘もなされている²⁴。「悪魔の恋人」と比較した場合、二つの作品の間に流れた約40年間に起きた女性を取り巻く状況の変化を読み取ることができるし、「帰還のタンゴ」により注目するならば、バラードやタンゴのいわば因習的なストーリーを、語りの中に組み込まれた伝統、バリエーションを生み出す口承の伝統に従って巧妙に反転していると言える。つまり伝統的な物語をそこに内在する語りの仕掛けで打ち破っているわけで、ここでもこの作品の特徴的な語りが効果を発揮しているのだ。一方でこの作品のもう一つの由来、パット・アンドレアの画集にさかのぼると、「反転」の別の理由も見えてくる。El País紙の記事はこの失われた本再発見の立役者エウヘニア・ニーニョ(Eugenia Niño)のコメントとして、「彼[パット・アンドレア]の作品においては全ての女性たちから浮かび上がる大きさと力づよさの前に男たちはつまらないくらい小さく見えてとても興味深い」と書いている²⁵。ここにもすでに「反転」の契機を見いだすことができる。

とはいえ、マティルデは自身の運命を握っているわけではない。そのことは何度も言及されるソファの上の読みさしの小説によって象徴的に示される。たとえば以下の箇所に注目してみよう。

そしてあらゆることが未来となった、それはソファの上の伏せたままの小説の読み残したページに似て、すでに書かれ、読む前に完結していて、読むときに起きるより先に起きてしまっているのだから読む必要すらないものだった。²⁶

起きるべきことが起きようとしていた、ソファの上の開かれたままの小説のようにすでにそこにあることが²⁷

ソファの上の小説がこの作品そのものを暗示している可能性がある一方で、「反転」ということに注目して、読みさしの小説が「悪魔の恋人」のような物語だとすれば、彼女は呪縛を逃れて結末を変えたというストーリーをそこから読み取ることができるかもしれない。しかし、それでも避けがたい死はふたたび彼女を待ち受ける。結末はすでに書かれていたのだ。この作品にはエピグラフとしてカナダの詩人マルセル・ベランジェ(Marcel Bélanger)の「裸と黒」(“Nu et noir”)という詩の一節が引かれている。人はたとえ思いがけない災難を免れたとしても「時＝ナイフ」(“l’heure-couteau”)すなわち「時の大鎌」が彼を待ち受けていて最後にあてがわれるのは冷たい墓のみだ、詩はおおよそそのような内容を語る²⁸。「ナイフ」はもちろんタンゴの歌詞に頻出する特別の武器で、詩においてナイフが象徴する運命の時は、マティルデの結末を予告すると同時に、「悪魔の恋人」のヒロイン、ミセス・ドローヴァーを待ち受ける不吉な手紙に記された「約束の時刻」(“the hour arranged”)²⁹でもある。これはすべてのバリエーションを通して貫かれる共通のテーマだ。

6. 結びにかえて

「悪魔の恋人」に関する論文の多くは、多かれ少なかれ戦争という時代背景の果たす役割について指摘している³⁰。しかし「帰還のタンゴ」の場合、そこに戦争の影を見いだすことは一見難しい。唯一、マティルデが容易にエミリオの死亡届をねつ造できたというくだりに、軍政下で確たる罪証もないまま拉致され消えてしまった「行方不明者」(“los desaparecidos”)の問題を抱えていた当時のアルゼンチン社会を垣間みることができるのみだろう。しかしそれは無視されているのとは違う。画集の作家、パット・アンドレアはこう明言する。

私は軍人たちのアルゼンチンのこと、クーデターのこと、拷問官たちのことを語りたかった

んだ。すべてのデッサンで繰り返されるのは短剣、常に裏切りによって背後から突き刺された短剣なんだ。³¹

彼らはそれを別の形に託して語るという方法を選んだのだ。ボウエンは『悪魔の恋人』のアメリカでの出版に際して付した序文で、幻想についてこう語っている。

『悪魔の恋人』所収の] 短篇群では幻想は危険なものではないし、それらの短篇は精神的な危険のスケッチであるわけでもない。幻想は登場人物たちにとって無意識的で直感的な身を守る手段なのだ。戦時の規制によって単調になり、変化によって感情的に引き裂かれ不毛になった生活は、他の方法によって回復されなくてはならなかった。³²

フローラと語り手の錯綜した語りによって作り上げられる一種の幻想が、「帰還のタンゴ」のひとつの特徴だったわけで、これははからずもボウエンが述べたような幻想と同じ意味を持っているといえないだろうか。すなわちボウエンがロンドンを舞台に展開した幻想は、フローラと語り手が軍政下のアルゼンチンでの生活の上に張り巡らせる語りの上での幻想であり、それはまた当時のアルゼンチンの惨状を描き出すためにパット・アンドレアが利用したナイフの一撃というタンゴの歌詞の情景、つまり一種の幻想でもあるとみなすことができるからである。

注

¹ El País 紙の電子版アーカイブを参照した。

El País. “A Coruña dedica una retrospectiva a la figuración de Pat Andrea” 27 Dec. 2005 <http://elpais.com/diario/2005/12/27/cultura/1135638002_850215.html> (アクセス日: 2012 年 8 月 9 日)

² Centro Virtual Cervantes. “El tango de la vuelta” <http://cvc.cervantes.es/literatura/libros_cortazar/tango_vuelta.htm> (アクセス日: 2012 年 8 月 9 日)

³ Ricardo Bada. “El primer libro póstumo de Julio Cortázar” *La Jornada Semanal* 21 Oct. 2007 <<http://www.jornada.unam.mx/2007/10/21/sem-bada.html>> (アクセス日: 2012 年 8 月 9 日)

⁴ Julio Cortázar & Omar Prego Gadea. *La fascinación de las palabras* (Buenos Aires: Alfaguara, 2004) p. 90

⁵ フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』野谷文昭訳 (東京: 岩波書店、2008 年)、93 頁

⁶ Raúl Silva-Cáseres. *El árbol de las figuras: estudio de motivos fantásticos en la obra de Julio Cortázar* (Santiago: Lom Ediciones, 1997) pp.188_194

⁷ Julio Cortázar & Omar Prego Gadea. *La fascinación de las palabras* p. 89

⁸ *Ibid.* p. 128 以下、拙訳をもって引用原文に替えることとする。

⁹ 作品のタイトル“The Demon Lover”は「幽鬼の恋人」や「魔の恋人」などとも訳され、訳語は定まっていないようだ。本稿では「悪魔の恋人」を訳語として採用した。

¹⁰ Elizabeth Bowen. *The Demon Lover and Other Stories the Collected Edition* (London: Jonathan Cape, 1952) pp. 91-99 を参照

¹¹ フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』107 頁

¹² コルタサルは夢の中でこの「街」にたびたび「降りて」行き、そのたびに未知の通りを歩き回った結果、いまや地図が描けるほどだと述べている。「街」は複数の実際の都市に由来する要素で構成

されており、遠く離れた人物たちの出会う港のようなものだとも言う。(Julio Cortázar & Omar Prego Gadea. *La fascinación de las palabras* pp. 156_160)

¹³ Neil Corcoran. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return* (New York: Oxford University Press, 2004) p. 149_150

¹⁴ Julio Cortázar. *Obras completas VI* Edición de Saúl Yurkievich (Barcelona: Galaxia Gutenberg, 2006) p. 106

¹⁵ Julio Cortázar & Carol Dunlop. *Los autonautas de la cosmopista o Un viaje atemporal París ~ Marsella* (Buenos Aires: Alfaguara, 2008) p. 140

¹⁶ この作品は旅行記という体裁をとりながらフィクションや短篇小説の断片などを含んでいる。また、カラックとポランコについてコルタサルは以下のように述べている。

「カラックとポランコは」フェルナンド・ペソアのパラレルな詩人たちのような異名というところまではゆかない。……私にとって彼らはアルゼンチンへの郷愁なのです。話し方や皮肉、同時に善良さ（というのも彼らは私のことが大好きだから）という点で、とてもブエノスアイレスっ子らしい二人の登場人物です。(Julio Cortázar & Omar Prego Gadea. *La fascinación de las palabras* pp. 260_261)

¹⁷ Jorge Luis Borges. *Obras completas* (Buenos Aires: Emecé Editores, 2001) pp. 160_163

¹⁸ Ernesto Sábato. *Obras II ensayos* (Buenos Aires: Editorial Losada, 1970) pp. 441_452

¹⁹ もっともボルヘスはサバトとの談話の中で、タンゴの世界に後から加わったバンドネオンは好きになれない、バンドネオンなしでピアノ、フルート、バイオリンだけで演奏したほうが彼の耳には心地よいと語っている。(Jorge Luis Borges & Ernesto Sabato. *Diálogos* (Buenos Aires: Emecé Editores, 1977) pp. 74-76)

²⁰ Neil Corcoran. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return* p. 149

²¹ フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』92 頁

²² Gordana Yovanovich はこの作品の語りの特徴に触れ、この作品、さらには短編小説全般が読者の読書経験のコンテクストに基づいて手を加えられ、補間されて受容されることと関連づけている。(Gordana Yovanovich. “Character Development and Short Story: Julio Cortázar ‘Return Trip Tango’” *Studies in Short Fiction* 27.4 Fall 1990, pp.551-552) 彼女はエミリオが「幽霊じみたところはなかった」と描写されることについて、作品の記述を引用しつつ、語り手「ぼく」がエミリオを想像しながら彼を現実として知覚していたからだと述べる。(Ibid. p. 548)

²³ たとえば Douglas A. Hughes がそのような解釈を展開する。(Douglas A. Hughes. ‘Cracks in the Psyche: Elizabeth Bowen’s “The Demon Lover”’ *Studies in Short Fiction* 10.4 Fall 1973 pp.411-413 Retrieved Apr. 26, 2012, from the Literature Resource Center) もちろんその他にも様々な解釈が試みられているがここでは触れない。

²⁴ 野谷文昭「解説」フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』206 頁

²⁵ El País. “A Coruña dedica una retrospectiva a la figuración de Pat Andrea”

²⁶ フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』100 頁

²⁷ 同書 102 ページ

²⁸ Marcel Bélanger. *Migrations* (Montréal: L’hexagone, 1979) p.57

²⁹ Elizabeth Bowen. *The Demon Lover and Other Stories* p. 93

³⁰ たとえば山根木加名子はこの作品を論じる時、戦争という時代背景は無視できないと述べる。(山根木加名子『エリザベス・ボウエン研究』(東京: 旺史社、1991) 139 頁)そのうえで彼女はボウエンの言葉を引用しつつボウエンが問題にしたかったのは「戦時下で彼女 [ミセス・ドローヴァー] のサバイバルを支える幻想の重要性と、それを通しての確かな生の実感」だったのではないかと結論している。(同書 145 頁)

³¹ El País. “A Coruña dedica una retrospectiva a la figuración de Pat Andrea”

³² Elizabeth Bowen. *Collected Impressions* (London: Longmans, Green, 1950) p. 49

参考文献

- Bada, Ricardo. “El primer libro póstumo de Julio Cortázar” *La Jornada Semanal* 21 Oct. 2007
<<http://www.jornada.unam.mx/2007/10/21/sem-bada.html>>
- Bélanger, Marcel. *Migrations* Montréal: L’hexagone, 1979
- Borges, Jorge Luis. *Obras completas I* Buenos Aires: Emecé Editores, 2001
- ボルヘス、ホルヘ・ルイス『エバリスト・カリエゴ』岸本静江訳 東京：国書刊行会、1978 年
- Borges, Jorge Luis & Ernesto Sabato. *Diálogos* Buenos Aires: Emecé Editores, 1977
- Bowen, Elizabeth. *Collected Impressions* London: Longmans, Green, 1950
- . *The Demon Lover and Other Stories* the Collected Edition, London: Jonathan Cape, 1952
- Centro Virtual Cervantes. “El tango de la vuelta”
<http://cvc.cervantes.es/literatura/libros_cortazar/tango_vuelta.htm>
- Corcoran, Neil. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return* New York: Oxford University Press, 2004
- Cortázar, Julio. *Obras completas I* Edición de Saúl Yurkievich Barcelona: Galaxia Gutenberg, 2003
- . *Obras completas III* Edición de Saúl Yurkievich Barcelona: Galaxia Gutenberg, 2004
- . *Obras completas VI* Edición de Saúl Yurkievich Barcelona: Galaxia Gutenberg, 2006
- コルタサル、フリオ『通りすがりの男』木村榮一他訳 東京：現代企画室、1992 年
- 『すべての火は火』木村榮一訳 東京：水声社、2001 年
- 『愛しのグレンダ』野谷文昭訳 東京：岩波書店、2008 年
- Cortázar, Julio & Carol Dunlop. *Los astronautas de la cosmopista o Un viaje atemporal París ~ Marsella* Buenos Aires: Alfaguara, 2008
- Cortázar, Julio & Omar Prego Gadea. *La fascinación de las palabras* Buenos Aires: Alfaguara, 2004
- El País. “A Coruña dedica una retrospectiva a la figuración de Pat Andrea” 27 Dec. 2005
<http://elpais.com/diario/2005/12/27/cultura/1135638002_850215.html>
- Hughes, Douglas A. “Cracks in the Psyche: Elizabeth Bowen’s “The Demon Lover”” *Studies in Short Fiction* 10.4 Fall 1973
- キップリング、ラドヤード他『20 世紀イギリス短篇選（上）』小野寺健編訳 東京：岩波文庫、2006 年
- Sábato, Ernesto. *Obras II ensayos* Buenos Aires: Editorial Losada, 1970
- Silva-Cáseres, Raúl. *El árbol de las figuras: estudio de motivos fantásticos en la obra de Julio Cortázar* Santiago: Lom Ediciones, 1997
- 山根木加名子『エリザベス・ボウエン研究』東京：旺史社、1991
- Yovanovich, Gordana. “Character Development and Short Story: Julio Cortázar ‘Return Trip Tango’” *Studies in Short Fiction* 27.4 Fall 1990

La resonancia de la balada en el tango

Un análisis de “Tango de vuelta” y “The Demon Lover”

NOGUCHI Yu

“Tango de vuelta” de Julio Cortázar, uno de los grandes escritores argentinos, es un cuento mucho más profundo que su propuesta de intriga que es aparentemente fácil de captar. Este cuento publicado en los últimos años de su vida, trata sobre un incidente causado por la traición de la heroína, parece influido por “The Demon Lover” de Elizabeth Bowen, cuyo tema deriva de una balada, y que comparte una trama semejante salvo por el desenlace. Además de esta similitud, existen unos escritos por el mismo Cortázar que insinúan una inspiración de “The Demon Lover”. Este ensayo, se enfoca en un análisis de “Tango de vuelta” en comparación con “The Demon Lover”, examinando la posibilidad de la relación entre estos dos cuentos.

El análisis se desarrolla a base de cuatro temas; la estructura de narración, la inversión en el desenlace, el fatalismo y la función de “lo fantástico” bajo la situación dura de la guerra. El narrador en este cuento relata la historia que le ha contado la otra personaje, que es la testigo del incidente, de igual manera como los cantantes de baladas transmiten sus historias de generación en generación inventando diversas variaciones. Esta estructura en narración no solo representa los vínculos intertextuales, sino que también transforma efectivamente el desenlace en el cual se puede indicar el cambio de las circunstancias que rodean a las mujeres y la influencia de los dibujos de Pat Andrea, que le pidió a Cortázar que le escribiera este cuento para su libro de pinturas. El tema del fatalismo es lo que tienen en común “Tango de vuelta” y “The Demon Lover” y pese a la diferencia en su desenlace y el epígrafe parece que obtienen el sentido justo en este aspecto. El final de este ensayo trata de la perspectiva de “lo fantástico” en Bowen. Su visión de “lo fantástico” como un recurso para recuperarse de desastres se puede ver también coincidentemente en “Tango de vuelta”.

De esta manera se puede ver que “Tango de vuelta” funciona como una variación de una especie de balad, y que contiene un riquísimo trasfondo histórico y universal.